人間科学研究　第33巻第１号　27－38（2020）

原著論文

名古屋におけるムスリムコミュニティの様相
―戦前期と現代のモスク設立の動きを中心に―

クレシ サラ好美

Muslim Community in Nagoya
～ A Focus on Mosque Establishment Movements of Pre-WWII Era and Today ～

QURESHI, Sarah Yoshimi

(Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University)

(Received：November 16, 2019 ; Accepted：January 30, 2020)

Abstract

There have been 2 mosques established in the city of Nagoya. The first was established in Chikusa-ward before WWII in 1936, and the latter in Nakamura-ward in 1998. Both “Nagoya Mosques” were reliant on Muslim immigrants residing locally. The Muslims undertook responsibilities at all stages of establishing the mosques from initial fund gathering, purchasing of land, to their final construction. Issues regarding finances of the first mosque were managed by Tatar Muslims that often peddled on the streets of Nagoya, who were supported by a more affluent community in Kobe. For the second mosque, this role was fulfilled by study abroad students supported by foreign laborers and successful business men. This paper investigates why these Muslim immigrants who had limited Japanese language capability and financial resources were so determined in making an enormous investment to establish a mosque in Japan. Struggles they faced in maintaining their community, and how these were resolved will also be explored. At the same time, this paper aims to serve as a historical record of the pre-WWII era “Nagoya Mosque”, a mosque that has not yet been sufficiently studied, and also of the post-WWII “Nagoya Mosque” with focus on its background of establishment and its activities up to date.

Key Words：Muslim, mosque, Muslim community, Nagoya Mosque, Tatar

１．はじめに

第二次世界大戦前，日本国内には神戸，名古屋，東京の３か所にモスク[1]が存在していた。いずれも1930年代に設立されたもので，福田[1, 2]が神戸モスクの設立経緯を詳しく論じ，森本[3]や坂本[4]が東京モスクの沿革を記している。しかし，名古屋の

[1] 早稲田大学人間総合研究センター *(Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University)*

モスクは戦中に焼失してしまったために，先行研究においてその存在が認知されていないことが多く[2]，吉田[5, 6]がタタール人の研究に関連して言及する程度である。本稿の前半では，日本で二番目に設立されたモスクでありながら注目されることの少ない，戦前期の名古屋モスク設立に向けたムスリムコミュニティの様相を記す。

戦後は約半世紀の間，国内に新しいモスクは設立されず，国内在住のムスリムは既存のモスクおよびいくつかのムサッラー（一時礼拝所）を利用していた。ところが，経済成長末期の1980年代，単純労働の分野での人手不足を補うかのように相次いで入国した外国人ムスリムによってこの流れが変わる。関東に集住していた外国人ムスリムは[3]，成人男性にとって義務である金曜日の集団礼拝[4]に参加するため渋谷区にある東京モスク[5]を利用した。モスクから遠く離れているほどアッラーから受ける報償が大きいというハディース（預言者の伝承）もあり[6]，都内居住者だけでなく，近隣県からも距離に関わらず参加する者は多かった。しかし，東京モスクが老朽化のため1984年に閉鎖されると，彼らは集団礼拝の場を失う。1986年の解体までは敷地内に強引に入り込んで礼拝を続ける者もいたが，多くは世田谷区のイスラミックセンター・ジャパンや港区のアラブ・イスラーム学院内にあるムサッラーに礼拝の場を移していった。しかし，ムサッラーで行う礼拝とモスクで行う礼拝とでは，アッラーから得られる報償が異なる[7]。都内に足を運ぶ必要がなくなった近隣県のムスリムは，居住地周辺にムサッラーを確保し，次第に各地にムスリムコミュニティが形成されていく。コミュニティの成熟とともにモスク設立が待望されるようになり，これがその後現在にまで続く国内各地におけるモスク設立の動きにつながる。

各コミュニティ内で集められたサダカ（任意の寄付）により，1990年代には関東に９か所，東海と北陸に各１か所のモスクが設立された。2000年代以降もモスク設立ラッシュは続き，早稲田大学「滞日ムスリム調査プロジェクト」作成の「全国モスクリスト」に掲載されているモスクの数は，2009年の時点で56[7]，2014年の時点で79[8]，2017年の時点で100[9]に増えている[8]。桜井[10]は，2001年までに設立された関東圏および東海のモスク・ムサッラー15か所を訪問し，その後店田・岡井[7, 11]は2005年から2009年にかけて北海道や九州のモスクを含めた全国的なモスク・ムサッラー25か所の調査を行っている。これらの調査記録は，急増するモスクと外国人ムスリムを，グローバル化の途上にあった日本社会の中に位置づけ理解するのに大いに貢献した。しかしながら，いずれも土地・建物の情報，モスクの機能，活動内容，礼拝者の数や国籍など，モスクの「現在」に焦点を当てた簡潔な記録に留まる。そこに至るまでの「過程」すなわち設立に至った経緯の詳細が述べられていないのは[9]，調査対象が多いために個々のモスクに費やす調査時間が限られていたためであろう。そこで本稿の後半では，調査対象を名古屋モスクに絞り，モスク設立までのコミュニティの歴史を詳細に記すことで，現在も続くモスク建設ラッシュおよび各地に広がるムスリムコミュニティを考察する際の手懸りを提示したい。

２．戦前期の名古屋のムスリムコミュニティ

宗教法人名古屋イスラミックセンター（以下，名古屋イスラミックセンター）が管理する名古屋市内の霊園に，「マホメット墓地」なる区画がある。1928年８月から1935年１月にかけて，タタール人が墓地使用権を購入したものである[10]。墓地名義人は，フアテフナーデルシン，サフアワレーフ，サイガレーフ，ハミドリンテンメル，ハツサンキリケーフ，ボツサイエンキリケーフ，カリムシゼガーノフ，ダブリチヤシゼガーノフ，メアラスラノフ，マクストーフ，アフンザン，ハイダルハイモデン，バイムハメデ，ガラムシハータル，タルピシフの15名。そのうち，この墓地に埋葬されているのは1942年に死亡したサフアワレーフのみで，その他は名義人の家族が数人埋葬されており，88㎡余の区画のうち使用されているのは半分に満たない33㎡である。戦禍を逃れ名古屋を離れたタタール人が使用権を放棄したためであろう。ではそのコミュニティの始まりはいつか，どのような活動が行われ，いかにしてモスク設立に至ったのか。タタール人に関する研究といくつかの歴史的資料から検証する。

2.1　名古屋回教徒團

戦前期の名古屋にモスクが設立されたのは1936年11月，その翌年１月の開所式の際に配布された記念冊子に設立の経緯が記されている[12]。

名古屋イスラム教會建設の由来
私共は私共の故郷トルコタタールがソヴェート露西亞の管轄に屬し信教の自由を失ひ壓制政府の下に苦汁を味わはねばならぬ事になつたので此壓迫より逃れんとして獨立を計り革命運動を起したが裏切り者が出でゝ幹部の人士は殆んど全部捕れて死刑に處せられた。之を知つた我々は一切の財産を放棄して逃げて滿州に來り轉じて日本に移り此名古屋市に定住することになつたのが今より十一年前である。(中略) 我々は此名古屋に僅かに十家族五十二人の少數でありますが何とかしてイスラム教會を建設して之を共同禮拜所となし合せて子女の普通教育機關にしたいと思ふて資金を集めましたが到底目的を達成する丈けの金が出來ない。依つて日本及滿州に住する同信徒より寄附を仰ぎ又日本人の篤志家に援助を請ひて茲に目的を貫徹して名古屋イスラム教院を建設することが出來たのであります。(後略)

1917年のロシア革命後，内戦と共産党政権による圧力を避けて多数のタタール人避難民がシベリア鉄道沿いに満州へ流入，一部が日本に渡り，東京・名古屋・神戸・熊本にタタール人コミュニティを作った[13]。外務省外交史料館の資料には，名古屋に定住したタタール人が1931年のイード礼拝[11]の際に，名古屋回教徒團を結成したとの記録がある[14]。その規約には，団長ムーラアフメート・アラスラフーバー（墓地名義人メアラスラノフに同じ），会計スンデ・サイガレーフ（同サイガレーフ），書記デイレツシヤー・シズカノーフ（同ダブリチャシゼガーノフ）の名が連ねられ，毎週金曜日と年二回の礼拝をサイドガリエフ（会計のサイガレーフに同じ）の居宅で行うと記されている。同資料には，1932年のイード礼拝[12]の記録も見られる[15]。サッハ・ワレーフ(墓地名義人のサフアワレーフに同じ),ハイダル・ハイモチーフ(同ハイダルハイモデン),ガイリヤム・シマハタロー（同ガラムシハータル），オシネジン・サイガレーフ（同サイガレーフ），フオーサエン・キリケーフ(同ボツサイエンキリケーフ),ハーサン・キリケーフ（同ハツサンキリケーフ），ゼフ・シゼガーノフ(同カリムシゼガーノフ),ダウラシヤ・サーズガノフ（同ダブリチヤシゼガーノフ），ムーワハアハマツテ・アルスターフ(同メアラスラノフ),テーミルバイ・ハミドリーフ（同ハミドリンテンメル），シャラピー・ナスモチーフ（同タルピシフ）の11名が参加し，「マホメット教僧侶キリケーフ」司会のもとにサッハ・ワレーフの家に集まったとある。

上記イード礼拝がワレーフの家で行われたことは，毎週金曜日と年二回の礼拝をサイドガリエフの居宅で行うという名古屋回教徒團の規約と齟齬がある。しかし，同資料に記された各人の住所から，ワレーフ他２名もサイガレーフと同じ西区上畠町に住み，どの家も現在の外堀通沿いに面して並ぶ徒歩１分ほどの距離であったこと[13]，イスラームの礼拝には清浄な敷物以外特段の準備がいらないことから，実際にはそれほど厳格に礼拝場所が決まっておらず，同じ町内に住む同郷の仲間が互いの家を行き来して礼拝していたと考えていいだろう。いずれであれ，記録に残る名古屋で最も古いムサッラーは西区上畠町にあり，それは現在の西区那古野２丁目にあたる。

2.2　イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部

1934年３月，名古屋のタタール人は，アヤズ・イスハキーが設立したイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会（以下，タタール文化協会）の名古屋支部を創設する。タタール文化協会は，その後満州や朝鮮にも本部支部を置く大規模なタタール人の親睦団体であるが，一時期神戸に本部が置かれたことからも，国内においては神戸のコミュニティが中心であったことは間違いない。そしてこのネットワークへの参加が，名古屋のモスク設立を資金面で後押しする結果となる。吉田[6]によれば，1935年８月にモスク建設用の土地を購入したものの，資金の確保が難しく建設活動は一時中断され，神戸のアグルジから1000円を借り入れて建設を再開したという。アグルジは，タタール文化協会の前身の神戸トルコタタール協会で会長を２期務めた，いわば神戸の有力者である[1]。わずか52人から成る名古屋のコミュニティが羅紗や金物の行商で生活を立てる零細商人の集まりだったのに対して[14]，150人のタタール人を抱え裕福なインド人貿易商が多い神戸のコミュニティは[1, 2]，数の上でも財政的な面でも優位にあった。

ところで，記念冊子にある通り，モスク設立と同様「子女の普通教育機關」の創設もまた彼らの重要な関心事であった。モスク完成間近の時期，イスラム學校に関する記事が新聞に掲載されている[16]。

> ハミドリンさんのお隣のキリケーフさんの宅を今池町の教會竣工までの學校にあて，彼等の學齢兒童十二人を集めバイム・ハメリさん[14]，本誌天神山販賣店主吉田源一さんの二人が先生となつて熱心に教えてをる，同町二丁目西部の町總代長谷川斧さんが顧問となつて彼等の一切を世話をしてをる

記事には，タタール人が「名古屋にも十世帯五十二人が天神山町付近に住み」とあり，「天神山町のロシア街」と見出しのある写真が添えられているから，この時期，キリケーフとハミドリン以外のタタール人もこの地域に移転していたと思われる。1936年３月のイード礼拝が天神山で行われていることからも[6]，ムサッラーは上畠町から天神山に移されていたと考えるのが妥当だろう。そうだとすれば，名古屋で二番目のムサッラーは，現在の西区天神山町４番の名古屋西郵便局の辺りにあったことになる。

2.3　名古屋モスク[15]

1936年11月，工費4000円をかけて[16]名古屋市今池町３丁目135番地にモスクが完成する。小村が「約四十㎡ばかりの処で木造モルタル二階建[17]」と描写する小規模なモスクであった。完成直後のイード礼拝[16]はここで行われ，その際に撮影されたキリケーフとハミドリンを囲む39人のタタール人の写真が記念冊子に掲載されている[12]。

1937年１月22日の開所式では，吉田[6]によれば，アグルジが名古屋モスクの扉を開け，アグルジの後任の神戸トルコタタール協会会長[1]シャムグニが金曜礼拝を行い，それに続く祝賀会でもシャムグニがスピーチを行ったという。神戸のコミュニティの要人が開所式で主要な役割を果たしていることは，記念冊子全24ページのうち，イスハキーの紹介記事に１ページ，アグルジの略伝に２ページ，シャムグニの寄稿文に４ページが割かれていることと併せて，イスハキーと彼を支持する神戸のタタール人が名古屋モスク設立にいかに多大な貢献をしたかを示している。

名古屋モスクの活動に関する資料は十分でないが，キリケーフがこのモスクのイマーム（礼拝の先導役）を務め[12]，金曜礼拝と二大祭のイード礼拝が行われていたことは間違いない。イスラム學校は，天神山から名古屋モスクの建物の二階に場所を移して続けられたようである[17]。1939年にキリケーフは神戸に移転したが[1]，吉田[6]の記録には1944年５月に委員会の改選があったことが記載されているから，戦時下においても名古屋のコミュニティは存続していたと思われる。しかし1945年５月14日，米軍機B26の空襲によってモスクは焼失する。焼け跡に現れたハミドリンは，隣家の夫婦に向かって「もうこの土地を処分して全部神戸へ引揚げる積りです[17]」と語っており，この時点でコミュニティは解体あるいは消滅したのだろう。しかし，ハミドリンだけは名古屋に残り，1963年までこの地で暮らしていたことがその年の新聞からうかがえる[18]。

> 四十年間名古屋に住みついていたトルコ人のT・ハミドリンさん（六七）が一八日，母国に帰る。（中略）手堅く誠意をこめたあきないで日本の友人も多くなり，その人たちにささえられて苦しい戦時を耐え抜き，すっかり“名古屋の人”となって，最後は中区新栄町三ノ一七に店を構えた。今度帰国することになったのは，長男のサリットさん（三二）が母国で結婚するのと，余生を子どもたちのそばで暮らすためだが，名古屋は第二のふるさとですと，名古屋弁で語るハミドリンさんは，離れるのがつらそう（後略）

記事にはハミドリン以外のタタール人に関する記述は一切ない。本章冒頭に示した「マホメット墓地」の概要図には，1953年１月17日に15人分の区画すべての名義を「チマーバイハミドリン氏に変更」との書き込みがあることからも，戦後名古屋に残ったのはハミドリンのみであったと考えられる。その後1980年代に至るまで，名古屋におけるムスリムコミュニティの記録はない。この地にモスクが建てられるのは焼失から53年後のことになる。

３．戦後の名古屋のムスリムコミュニティ

1983年に文部省（当時）が策定した「留学生10万人計画」は，1982年に8116人であった留学生数[19]を21世紀初頭には10万人にしようというものである。名古屋でもイスラーム諸国からの留学生が増えつつあったが，彼らはモスクのない名古屋でどうやって金曜礼拝を行なっていたのか。その後数を増すムスリムを巻き込んで，名古屋のムスリムコミュニティはどのように形成されていくのか。そして新しいモスク設立に至る経緯はどのようなものだったのか。本章は，戦後の名古屋のコミュニティについて，名古屋イスラミックセンターに保管されている当時の資料を参照しながら，また当時を知る関係者からの証言をもとに記録を残す[17]。

3.1　名古屋ムスリム学生協会

この時期のコミュニティに関して得られた最も古い証言は，バングラデシュ人留学生だったラハマン・ジャムシェドによる。それによると，「1986年1月24日，来日して初めての金曜礼拝を名古屋大学の空き教室で行った。初めのうち参加者は10～12人しかいなかったが，１年もすると礼拝参加者は15～30人に増えた。しかし，大学から学内の宗教活動を禁止され教室が使用できなくなった。大学近くにアパートを借りるための資金援助を依頼すべく，1987年１月，日本人ムスリムの運転で東京へ行き，イスラミックセンター・ジャパン（以下，イスラミックセンター）を訪ねた。その後，名古屋の実状を知ってもらうため，イスラミックセンターの理事を招いて，名古屋大学留学生寮で会合を開いた。名古屋市外の留学生も参加して，約200人が集まった。そこでイスラミックセンターによるアパートの賃料補助が約束され，名古屋ムスリム学生協会（Muslim Student Association of Nagoya）を組織することと，私がその代表に就任することが決定した」とある。名古屋における戦後最初のムサッラーは，千種区不老町にある名古屋大学の空き教室だったことになる。

イスラミックセンターからの資金援助の約束を取り付けたものの，アパート探しは困難であった。当時の資料を見ると，ジャムシェドは「名古屋におけるほとんどの家主が私たちの活動に対して不快感を示すという現実に立ち向かわなければならなかった」と書き，後述のリビア人留学生アハメド・ムハマドは「まったく，日本人にはイスラームとその活動についてひどい偏見がある」と書いている。この後１年間，金曜礼拝は昭和区陶生町の名古屋大学留学生会館で行われた。これが二番目のムサッラーである。

3.2　名古屋イスラム協会

3.2.1　三番目のムサッラー

1988年２月７日名古屋イスラム協会（Islamic Association of Nagoya）（以下，イスラム協会）が組織され，初代会長にジャムシェドが着任した。名古屋ムスリム学生協会からの組織名変更の理由は不明だが，1988年末にジャムシェドが作成した活動報告書に，同年５月10日から家賃を払い始めたという記載があるので，アパートの賃借と関係があるかもしれない。この資料によると，「イスラム協会の最初の仕事は礼拝場所の確保だった。度重なる不愉快な思いを経て，ようやくこの場所を見つけた。ダイヤルロック式の郵便受けにスペアキーを入れておくことで，この場所を誰でも自由に利用できるようにした。この場所の清掃は会員が毎日交代で行う。６月３日より金曜礼拝が始まった。参加者は12～20人である。ハラールの食事を提供してもらえるよう名古屋大学と交渉した。東京から来た42人のタブリーグ集団[18]をこの場所でもてなした」とある。

「この場所」とは，名古屋大学の西に隣接する千種区東山元町に賃借したアパートである。これについて，翌年５月にムハマドが作成した資料に「初めは賃貸を断られたが，日本人の名義でアパートを借りられた」とある。賃借契約が難しい外国人留学生に代わって契約を結んだのは，当時のコミュニティ唯一の日本人ムスリム，アブドルハーディ杉山である。杉山は，この前年，ジャムシェドがイスラミックセンターを訪れた際に同行した日本人である。寝食を共にするタブリーグ集団を42人も受け入れていることから，たとえ雑魚寝でもそれだけの人数が宿泊可能な程度には広かったことが想像できる。初年度の収支報告は残っていないが，次年度のものにイスラミックセンターから毎月７万円の入金が記載されており，ムサッラーへの資金援助の約束はアパート契約時から果たされていたと思われる。

1989年末の活動報告書によると，「１月の役員選

挙でイスラム協会会長はジェムシェドから前出のムハマドに交代した。４月は毎週日曜日留学生会館でイフタール（断食明けの食事）とタラウィーフ（ラマダーン中に行うべき夜半の礼拝）が行われた。５月と７月のイード礼拝を留学生会館で行い100人が集まった。５月と８月に東京からパキスタン人集団の訪問があった。６月に冷凍庫が寄進され８月からハラール肉の販売が始まった」とある。パキスタン人集団はタブリーグ集団であろう，この頃から頻繁な訪問を受けるようになっている。冷凍庫については，ハラール肉が入手困難だった当時の会員の便宜を図ることに加え，売り上げをイスラム協会の運営資金に充てられるようにとの意図で，この頃コミュニティに参加し始めたパキスタン人自営業者クレシ・アブドルワハブが購入したものである。この年の収支報告書によると，ハラール肉販売で月平均1万7500円の利益が出ている。

3.2.2　四番目のムサッラー

1990年の活動報告書によると，「３月に杉山が突然コミュニティを去ったため[19]，彼の名義で賃借したアパートの契約更新ができなくなった。多くの困難を経てようやく見つけたこの場所は，アブドルワハブの会社名義で賃借した。移転のための募金プロジェクトでは，短期間で62万5000円が集まった。日曜日のイフタールとタラウィーフを留学生会館で行った。タブリーグ集団を３回受け入れたが，彼らはいつも事前に何の連絡もなく訪ねてくる。土曜日の新しいプログラムが豊橋のアラウッディンのアレンジで始まり，イスラームやクルアーンの勉強をするようになった。ハラール肉については，神戸から輸入牛肉を仕入れる一方，鶏肉の屠畜を会員が交代で行うことになった。金曜礼拝には毎週少なくとも35人が集まっている。モスクを造ろうという意見があるが，団体名で土地を購入するには非常に多くの手続きが必要となるため，イスラミックセンターの傘下に入ることも検討されている」とある。

四番目のムサッラーは，名古屋大学の東に隣接する千種区福原町のアパートで，賃借契約が難しい外国人留学生に代わって契約を結んだのは，外国人でありながらも会社契約が可能な自営業者であった。この頃から，流動的な留学生に代わってこの自営業者がイスラム協会の活動をサポートするようになる。その会社をイスラム協会の連絡先にして[20]，この時期増えつつあった国際結婚や日本人の入信の手続きおよびそれに伴うイスラミックセンターの証明書発行の取次も行うようになった。また，自分たちでハラール屠畜した国産鶏肉を販売し始めたことは，コミュニティにおける食の選択肢を広げる大きな出来事として特記すべきである。鶏肉処理施設を間借りして行った屠畜の様子は以下の通り[20]。

> まず，施設の通常営業時間にかからないよう，事前に約束した日の早朝にその週の当番二人が施設を訪れる。一人が生きたままの鶏の体を押さえ，もう一人が「ビスミッラー，アッラーフアクバル」と唱えて施設から借りた鋭利な刃物で気管・食道・頸動脈・頸静脈を一度に切断する。頭部と体は皮でつながった状態で，テーブルに埋め込まれた放血用のボウルに逆さまに入れていくという作業を繰り返す。当番の二人がこうして２時間ほどかけて30羽ほどの鶏を処理する傍らで，施設のスタッフが，完全に血が抜けた鶏を脱毛機にかけて羽を取り去り，頭部と足を切り落とす。当番の二人はこれらをビニールの大袋に入れて礼拝所までタクシーで運び，急いで一羽ずつ小袋に入れ直して冷凍庫にしまう。どんなに急いでも，礼拝所に設置した冷凍庫では急速冷凍ができないため，夏場は腐らせて捨ててしまったことも何度かあったという。

毎週土曜日のプログラムの後に食事が提供されるようになると，会員の連携はさらに深まり，コミュニティは徐々に成熟していく。

1991年の活動報告書によると，「会員の増加によりアパートが手狭になってきた。土曜日のプログラムに加え，クルアーン理解のためのアラビア語クラスも開設された。タブリーグ集団も引き続き受け入れている。日曜日のイフタールとタラウィーフを留学生会館で行った。断食明けのイード礼拝には200人が参加したため留学生会館に収容しきれず，犠牲祭のイード礼拝は名古屋大学インターナショナルレジデンスで行った。町のハラールショップではハラール肉が品薄なため，引き続きハラール屠畜を行っていく。昨年末開設したモスク設立のためのモスク基金口座には，現時点で131万9394円が集まっ

ている」とある。会員が増えコミュニティの活動が安定する一方で，集会場所の確保やハラール肉の供給が間に合わないなどの問題が生じてきた。収支報告によると，この年からイスラミックセンターによる資金援助が６万円に減額され，会員からのサダカとハラール肉販売による利益でコミュニティを支えていかなければならない状況がうかがえる。

3.2.3　五番目のムサッラー

1992年が明けてすぐ，また新しいムサッラー探しが始まる。湾岸戦争の勃発によるイスラームへの偏見の高まりと度重なる警察の訪問から，アパートの退去を通告されたためである。３か月にわたりいくつもの物件にあたった末，大学周辺の住宅街を離れて，ようやく繁華街に近いビルの一室を見つけ，今回もまたアブドルワハブの会社名義で賃借契約した。新しいムサッラーは，名古屋大学から地下鉄で２駅の千種区仲田北に位置し，留学生が講義の合間に立ち寄るには不便であったばかりか，室内は以前より狭く，家賃は13万円とそれまでの７万円に比べて負担は大きかったが，他に選択肢がないまま，これ以降６年間利用し続けることになる。

1992年の活動報告書によると，「多くの困難を経て，４月から家賃が非常に高額な現在の場所に移転した。外国人が日本でアパートを賃借することは容易ではなく，まして宗教活動に利用するとなるとなおさらである。会員数は増加しつつあり，ムサッラーは手狭である。毎週土曜日の勉強会の他，家族で参加できる集会を月１回貸ホールで開くことにした。日曜日のイフタールとタラウィーフを留学生会館で行った。イード礼拝は名古屋大学インターナショナルレジデンスと貸ホールで行った。ハラール屠畜は継続して行っている。モスク基金口座には，291万6111円が集まっている」とある。コミュニティを運営するにあたり，毎月の家賃や光熱費，ラマダーン中のイフタールや毎週土曜日に提供される食事の費用，この年から毎月の集会およびイード礼拝のために借りることになった貸ホールの使用料など，出費はますます増加する一方で収入は充分でない。モスク基金口座へのサダカは２年間で300万円近く集まったが，ニイヤ（行為のもとにある意図）を重視するイスラームでは，モスク設立のニイヤで集まったものを家賃や光熱費に充てるわけにはいかない。上記活動報告が行われた会合では，それまでの自発的なサダカを募るやり方を変えて，会員のリストを作成して定期的にサダカを集めることが話し合われた。

3.3　名古屋モスクプロジェクト

モスク建設用の土地探しを始めたのは1993年に入ってからである。新しいムサッラーでは毎月の家賃負担が大きいことが，具体的アクションを起こすきっかけになったのかもしれない。土地探しの条件は，①大通りに面した場所であること，②地下鉄東山線沿線の駅から徒歩圏内であることの2つであった。①は住宅街に大勢の外国人が集まることが近隣の不安を招くというこれまでの経験からであり，②は昼休みを利用して金曜礼拝に参加する名古屋大学留学生の利便性を考えたからである。名古屋大学の最寄り駅の本山[21]から順に１駅ずつ東西に移動しての土地探しが根気よく続いた。ようやく２つの条件に合う土地を見つけたのは，土地探しを初めて４年目の1997年。61.7㎡の狭小地ではあったが，本山から数えて10駅目の本陣から徒歩６分，交通量の多い片側２車線の大通りに面していた。この通りは奇しくも戦前期の最初のムサッラーがあった外堀通りであり，この土地はかつての上畠町から西にわずか1.5キロのところに位置する中村区本陣通2丁目にあった。

1997年４月５日，名古屋モスクプロジェクト責任委員にアブドルワハブ，山本郁郎，アリアブゼイド・オサマ（スーダン人），アブドルラハマン・ボハリ（インドネシア人），クレシ・アブドルガニー（パキスタン人），T.L.M・イムティアズ（スリランカ人），モハメドズィン・ザイド（マレーシア人）の７人が指名された。モスク基金口座にはすでに1215万円が集まっていたが，土地購入に必要な額は2310万円であり，国内外のムスリムおよび諸機関にも寄付を依頼するためすべての会員が奔走した。６月10日，オサマ，ボハリ，アブドルガニーの３人の責任役員が共同名義で売買契約を締結した。法人登記されていない団体は契約の主体になれないためである。

12月10日，安城市の東海ハウス株式会社が建設に着工，翌年７月１日に２つのミナレットを含む鉄骨造陸屋根４階建てのモスクが完成した。１階には事務所と男性用のウドゥ（浄め）スペースがあり，２

階が女性礼拝室と女性用のウドゥスペース，３階がミフラーブ（マッカの方角を示す窪み）を含む男性礼拝室，４階が男性礼拝室兼多目的室となっている。当初の設計では女性礼拝室は最上階に配置されていたが，小さな子どもを連れた母親が４階まで階段を上る大変さを考慮して２階に変更された経緯がある。男性優先のムスリムコミュニティが多い中[22]，女性に配慮する姿勢は，名古屋のコミュニティの大きな特徴である。これは，1994年以来個人宅で開かれていた日本人女性のための集会[23]の主催者がモスク責任委員の配偶者であったために，女性の声を集約して届けやすい条件が整っていたことによる。

モスク設立にかかった費用は，土地取得関連費用合計2310万円と建物関連費用合計約4470万円，合わせて約6780万円であった。

3.4　名古屋モスク

1998年７月24日，名古屋モスク開所式には，駐日サウジアラビア大使とともにマッカのアル=ハラムモスクのイマームが参列，サウジアラビア国王からはキスワ（カアバ神殿を覆う黒布）の一片を贈られた。新しく発足した名古屋モスクの役員には，上述の名古屋モスクプロジェクト責任委員７名に加え，当時のイスラム協会会長エルモラデ・アブドラヒム（モロッコ人）が着任した。

当時のモスクの活動は，イスラム協会がこれまで行ってきた活動に加えて，毎日５回の礼拝，クルアーン教室，葬儀，イスラーム関連冊子の配布，またラマダーン中毎週日曜日のみ行われていたイフタールやタラウィーフは毎日行われるようになった。この頃にはイード礼拝の参加者は1000人を超え，より収容人数の大きい貸ホールを手配することも活動のひとつとなった。上述の個人宅で行われていた日本人女性のための集会がモスクに場所を移したことで，この頃から国際結婚をきっかけに入信した日本人女性ムスリムが大勢集うようになる。

名古屋モスクについて特筆すべきは，モスク設立に中心的役割を果たした責任役員アブドルワハブが，モスクとして使用するニイヤにこだわった点である。戦後のモスク設立の流れにおいて，工場やコンビニなどの中古物件を買い取って改築するという手法が多く見られる中[24]，モスクのニイヤで設計・建設した新築のモスクは当時としては珍しく，現在でも数少ない。サダカ提供者のほとんどが自国への仕送りをしながら切り詰めた生活を送る外国人であり，それでも十分な資金を集めて新築のモスクを完成させたことは海外からも関心を寄せられ，マディーナの預言者モスクのイマームやマッカのアル=ハラムモスクのイマーム，ジェッダのモスクのイマーム，パキスタンのクルアーン朗誦者，サウジアラビア王子など多くの著名人が名古屋モスクを訪れている。

さて，モスク建設用土地の売買契約は３人の責任役員が共同名義で締結したことは上述したが，本来モスクは個人の所有であるべきでなく[25]，その所有権をモスクに移行するにはモスクを法人化する必要がある。３年分の活動実績を証明する書類がそろった2001年８月，愛知県が指定する「宗教団体であることを証する書類」を提出，12月25日に「設立に係る規則認証」を申請，2002年２月25日に愛知県より規則認証を受け，３月22日に宗教法人設立の登記を完了した。戦後設立されたモスクとしては初めての宗教法人の認可取得である。これによりモスクの土地建物は，７月８日，オサマ，ボハリ，アブドルガニーの３人から「宗教法人名古屋モスク」に所有権移転された。

3.5　岐阜モスク

名古屋モスク設立から10年後，岐阜市古市場東町田に岐阜モスクが設立された。名古屋のコミュニティ外ではあるが，姉妹モスクとして一言しておく。

岐阜大学留学生らもまた，大学内の空き教室で金曜礼拝を行なっていたが，次第に礼拝参加者が増えたことで大学から施設利用を禁止されるという経緯は名古屋と同じである。2005年２月４日，パキスタン人自営業者サリミ・シャーヒッドの名義で岐阜大学近くに購入した363.61㎡の土地に，レンタルのプレハブを設置して簡易的なモスクとしたが，永続利用可能なモスクを建築すべく，名古屋モスクに相談が持ち込まれた。同年５月16日，購入した土地の所有権を名古屋モスクに移転し，2007年10月12日，安城市の株式会社渡辺設計による設計で岐阜県揖斐郡の丸平建設株式会社が建設に着工，2008年６月30日，ドーム屋根とミナレットを有する鉄筋コンクリート造２階建の白亜のモスクが完成した。隣接する４筆の土地1316.42㎡も購入され，モスク完成時の敷地面積は1680.03㎡と，日本最大のモスクとなった[26]。

モスク設立にかかった費用は，土地取得費用合計約2721万円と建物費用合計約１億3463万円，合わせて約１億6184万円であった。これだけの金額を２年に満たない短期間で集められたことは，名古屋と岐阜のコミュニティを構成するムスリム一人一人の熱意と努力の大きさを示している。

７月24日の岐阜モスク開所式には，マッカのアル=ハラムモスクのイマームの他，アフガニスタン，イラン，イラクの駐日大使およびエジプト，モロッコ，オマーン，パキスタン，カタール，サウジアラビア，米国の駐日大使代理が参列して盛大に行われた。その後，岐阜モスクを名古屋モスクの支部として届け出をし，他県に境内建物を所有する宗教法人となったことで，2010年１月１日よりその所轄は愛知県知事から文部科学大臣に変更となる。

４．現在の名古屋のムスリムコミュニティ

名古屋モスク設立から20年余を経た現在，コミュニティの活動は多岐に渡る。ムスリムへのサポートはもちろんのこと，日本社会との接点としての役割も期待されている。現在の名古屋のコミュニティに特有の活動を概略する。

4.1　モスクの活動

名古屋モスク設立当初は常駐のイマームがおらず，短期的にエジプト人やモーリシャス人，ウガンダ人などがイマームを努めていたが，2009年９月以降はエジプト人イマーム，アブデルハーミド・アハメド師が常駐し，毎日５回の礼拝と毎週の金曜礼拝を先導している。前章に記したモスクの活動を継続して行うほか，2016年からは海外の篤志家による招待ハッジ（巡礼）の取りまとめも行うようになった。通常の金曜礼拝に集まるムスリムは300人を超え，2013年２月に購入したモスク裏の建物および2017年２月に購入したモスク西隣の建物に分散して収容している。イード礼拝参加者は，2016年頃から2000人を超すようになり，より広い会場の手配と当日の人員整理が必須となっている。

上記のムスリムを対象とした活動に加え，2014年以降は対外的活動にも積極的に取り組むようになった。日本人に向けた発信を意識して，ホームページを大幅に改編，フェイスブックにも公式ページを開設し，地域や他宗教との交流，自治体との連携，教育機関・自治体・企業に向けた出張講義や講演も行うようになった。それまでモスク見学希望者への対応は毎年数十人程度だったが，ホームページに見学者受入れの案内を掲載した2014年には172人，2015年には339人，2016年には351人，2017年には410人，2018年には305人と，対応数は急増した。イスラームに関心を寄せる日本人は多いがその受け皿がなかった状況を打開したかたちになる。国内100か所のモスクのうち，日本語でホームページを開設しているモスクは16か所しかなく，そのうち見学者受入れの案内ページを有するモスクはわずかに５か所という現状[27]を鑑みるに，日本人に向けた発信に注力する姿勢は名古屋モスクの大きな特色である。

4.2　自主グループによる活動

モスク設立時から開かれていた日本人女性のための集会は，現在，複数の自主グループが運営する各種集会に発展している。例えば，第一・第三土曜日は母子で参加する幼児クラス，第二土曜日は初心者向け講座，第四土曜日は妊娠中や子育て中の母親のための講座が２時から開かれ，第一土曜日はお茶会，第二・第三・第四土曜日は勉強会が3時から開かれている。かつては，子ども連れの女性はお茶会や勉強会に参加しづらかったが，参加者が交代でベビーシッター役を務めるなどの工夫を経て，現在は3時からの子ども勉強会に子どもを預けることで安心して集会に参加できるようになっている。これらすべての集会は，日本人女性ムスリムのボランティアによって準備され運営されている。モスク代表役員が，その配偶者を含む日本人女性の活動を応援する立場を取っていることが，女性が積極的に関与する名古屋のコミュニティの特徴につながっている。

ところで，国内のモスクに共通する問題のひとつとして，第二世代ムスリムのモスク離れがある。幼いうちは親に連れられてモスクに来ていた子どもたちも，成長するにつれて塾や部活動を言い訳にモスクを敬遠するようになる。その結果，ムスリムの仲間を持たない彼らは学校や地域でマイノリティとして孤立し，アイデンティティの確立に困難を感じるようになる。彼らがマジョリティでいられる場を提供するため，2014年８月に中高生お茶会が立ち上げられ，2018年１月からは高校を卒業した第二世代も参加できるよう，会の名称を「SYM名古屋モスク[28]」

に変更して，毎週土曜日５時から集会が開かれている。この年代のムスリムが大勢集まるという点もまた，名古屋のコミュニティの特色である。

4.3　宗教法人名古屋イスラミックセンター

これまで「名古屋モスク」という名称は，中村区本陣通２丁目に所在する礼拝施設としての名古屋モスクと，名古屋・岐阜の両モスクを運営する宗教法人としての名古屋モスクと２通りの意味で使われてきた。名称の混乱を防ぐため，名古屋・岐阜の両モスクを運営する法人名を名古屋イスラミックセンターに変更することとなった。2017年６月14日に文化庁に規則変更の認証申請をし，６月21日に認証を受け，６月27日に「宗教法人名古屋イスラミックセンター」が登記された。登記簿に記載された代表役員はアブドルワハブであり，名古屋モスク設立時から変更はない。４名の責任役員は何度か入れ替わったが，2019年10月現在，そのうち３名は日本人が務めており，さらにそのうち２名は女性であることを特記したい。この一点をもってしても，名古屋のコミュニティにおける日本人あるいは女性を重用する姿勢が国内における他のモスクと一線を画していることは明らかである。

５．おわりにかえて

名古屋にはこれまで２つのモスクが設立されている。1936年には現在の千種区今池に，1998年には中村区本陣通に，いずれも資金集めから土地購入そして建設に至るまで，この地に定住する外国人らが主体となって進められ結実したものである。両者に共通するのはそれを支えたムスリムコミュニティの存在である。戦前には行商で生計を立てるタタール人コミュニティに協力する神戸のコミュニティがあり，戦後には留学生のコミュニティに外国人労働者や自営業者が参加することで，資金面での課題解決が果たされた。日本語もままならず経済的にも決して余裕があるとはいえない外国人が，彼らにとって異国である日本で大金を投資して礼拝施設を造ることに首を傾げる日本人は少なくないだろう。しかし，彼らが進んでサダカを提供する動機を支える２つのハディースを知れば納得がいくかもしれない[25]。

＜集団で行う礼拝は家で行う礼拝や市場（職場）で行う礼拝に比べて二十数倍勝っている＞
＜至高なるアッラーのためにモスクを建てた人はアッラーが彼のために天国で家を建ててくださる＞

ムスリムにとっては，モスクで礼拝を行うことに大きな意義がある。だから身近にモスクがなければ，遠くのモスクにでも足を伸ばすし，新たなモスクを造るためにサダカを惜しまない[29]。その努力こそが来世を信じるムスリムにとってまた大きな満足につながる。収入の多寡にかかわらず，彼らが各自の精いっぱいのサダカを進んで提供することは当然のことなのである。

戦前期の名古屋モスクは残念ながら戦禍に焼失してしまったが，戦後に建てられた名古屋モスクは，礼拝施設としてだけでなく，現在さまざまな活動を行い利用者を増やしている。日本人ムスリムの関与によって，ムスリム同士の交流と学びの場であること，また日本社会との接点としての役割を果たすこと，女性が活躍することをその特色として，国内の他のコミュニティからも注目を浴びる存在となっている。これらの活動については，コミュニティの歴史に焦点を当てた本稿では詳細に論じることができなかったため，別稿で具体例を交えて論じたい。

引用文献

[1]　福田義昭「神戸モスク建立前史―昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成―」臼杵陽研究代表者『日本・イスラーム関係のデータベース構築：戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』，科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書，平成17年度～平成19年度 2008: pp.23-62

[2]　福田義昭「神戸モスク建立―昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業」『アジア文化研究所研究年報』45，東洋大学アジア文化研究所，2010: pp.32 (111)-51 (94)

[3]　森本武夫「東京モスクの沿革」『アッサラーム』20，イスラミックセンター・ジャパン，1980: pp.76-80

[4]　坂本勉「東京モスク沿革誌」『アジア遊学』30，勉誠出版，2001: pp.121-128

[5]　吉田達矢「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 ―人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学

院大学論集 言語・文化編』24 (2)，2013: pp.281-291

[6] 吉田達矢「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)―名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部の活動を中心に」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』50(1)，2013: pp.15-34

[7] 店田廣文・岡井宏文編『日本のモスク調査2 －イスラーム礼拝施設の調査記録－』,早稲田大学人間科学学術院 アジア社会論研究室，2009

[8] 店田廣文・岡井宏文「日本のイスラーム－ ムスリム・コミュニティの現状と課題－」『宗務時報』119，文化庁文化部宗務課，2015: pp.1-22

[9] 店田廣文・クレシ愛民『「自治体における多文化共生施策の現状と課題に関する調査」 －モスク所在の地方自治体を対象とする調査－第1次報告書』，早稲田大学人間科学学術院 アジア社会論研究室，2018

[10] 桜井啓子『日本のムスリム社会』，筑摩書房，2003

[11] 店田廣文・岡井宏文編『日本のモスク調査1－イスラーム礼拝施設の調査記録－』，早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室，2008

[12] テ-ハミドリン・エッチ-サイドガリ共編『THE NAGOYA MUSLIM MOSQUE』,名古屋トルコ・タタールイスラム教會，1937

[13] 松長昭『在日タタール人―歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』，東洋書店，2009

[14] 愛知縣知事香坂昌康発，内務大臣安達謙蔵・外務大臣幣原喜重郎ほか宛，昭和６年３月27日付「名古屋回教徒團設立二関スル件」，JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012533000（第7および第８画像目），本邦における宗教及び布教関係雑件／海峡関係，第一巻分割1（I.2.1.0.1），外務省外交史料館

[15] 愛知縣知事尾崎勇次郎発，内務大臣中橋徳五郎・外務大臣芳澤謙吉ほか宛,昭和７年２月13日付「マホメット教徒ノ會合二関スル件」，JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012533000（第10および第11画像目），本邦における宗教及び布教関係雑件／海峡関係，第一巻分割１（I.2.1.0.1），外務省外交史料館

[16] 新愛知，1936年９月13日「祖國獨立を待つ 酒はのまず勤勉で日本語練習 トルコ・タタール族」

[17] 小村不二男『日本イスラーム史』，日本イスラーム友好連盟，1988

[18] 中部日本新聞，1963年12月１日「40年間の思い出残し余生を母国トルコで ハミドリンさん近く帰国」

[19] 総務省『留学生の受入れ推進施策に関する政策評価書』，2005

[20] クレシサラ好美『ハラールとハラール認証 ―ムスリマの視点から実情と課題を探る』，慶應義塾大学湘南藤沢学会，2017

[21] 大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之共編『岩波イスラーム辞典』，岩波書店，2002

[22] 鈴木紘司「日本イスラーム史 ―７世紀から20世紀前半（1945年）まで」，サウジアラビア王国大使館文化部編『日本に生きるイスラーム: 過去・現在・未来』，サウジアラビア王国大使館文化部，2010: pp.91-105

[23] 法務省入国管理局編『在日外国人統計 昭和60年版』，大蔵省印刷局，1985

[24] アル=ジャザーイリー『ムスリムの道：ミンハージュ・アル=ムスリム 第４部』，ハウラ中田香織訳，ムスリム新聞社，1996

[25] ムスリム『日訳サヒーフムスリム』第1巻，磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治共訳，日本サウディアラビア協会，1987

[26] Mangera Abdur Rahmaan Ibn YusufMufti 2016 ‘BASIC ISLAMIC LAWS: THE FIQH OF MASJID ＆MUSALLA’ “Islam Reigns” https://islamreigns.wordpress.com/tag/musalla/ (2019.10.10アクセス)

[27] ‘Eid Al-Fitr’ “Online Panchang and Hindu Calendar for the World” https://www.drikpanchang.com/calendars/indian/muslim-festivals/eid-al-fitr/eid-al-fitr-date-time.html（2019.10.10アクセス）

---

1 イスラーム辞典には「モスクは礼拝専用場所であるが，ムサッラーは家屋や事務所の１区画を必要に応じて礼拝場所とする[21]」とある。本稿では，礼拝専用に設立された永続利用可能な施設を「モスク」と呼び，賃貸物件や施設内に設けられた一時的礼拝所を「ムサッラー」と呼んで区別する。

2 坂本[4]は「日本最初の神戸モスク」に続く章を「東京モ

スクの開堂」としており，松長[13]や鈴木[22]も，神戸モスクに続いて東京モスクが建設されたと述べている。

3 この時期多かったのは短期滞在査証免除措置を利用して来日したパキスタン人やバングラデシュ人。1984年の統計では，パキスタン人の80.9%，バングラデシュ人の63.3%が，関東の１都６県に居住していた[23]。

4 ハディースに，＜（金曜の）集合礼拝はムスリム全員に課せられた義務である。ただし，次の４つの者を除く。すなわち奴隷，女性，子供，病人である[24]＞とある。

5 戦前期には「東京回教礼拝堂」，戦後は通称「東京モスク」，「代々木モスク」と呼ばれるなど複数の名称があるが，本稿では「東京モスク」と呼ぶ。

6 ハディースに，＜集団礼拝で最大の報酬を受ける者は人々のうちで（モスクから）より遠くに住んでいる人であり，その遠い道程を歩いてくる人である[25]＞とある。

7 Abdur Rahmaan[26]は，ムサッラーでの礼拝によって得られる報償はモスクで得られる報償と同じではないという見解を示している。

8 出典先の「全国モスクリスト」にはいずれもバライ・インドネシア礼拝所とアラブ・イスラーム学院が含まれているが，前掲注1に従いムサッラーとみなし，この２件を除いて数えた。

9 例えば先行研究において、名古屋モスクの設立の経緯は，桜井[10]が約170字，店田・岡井[11]が約400字で述べる程度である。

10 名古屋市立八事霊園が1980年２月16日に作成した「マホメット墓地概要図」より。

11 イード・アル=フィトル（断食明け祭）とイード・アル=アドハ（犠牲祭）はイスラームにおける二大祭で，この日は午前中に集団でイード礼拝を捧げることが義務である。1931年のイード・アル=フィトルは２月19日[27]。

12 1932年のイード・アル=フィトルは２月８日[27]。

13 名古屋法務局所蔵の新旧住所対照の資料より。

14 墓地名義人のバイムハメデに同じ。

15 記念冊子[12]には「THE NAGOYA MUSLIM MOSQUE」「名古屋トルコ・タタール・イスラム教會」「名古屋イスラム教會」「名古屋イスラム教院」と複数の名称が使用されているが，本稿では「名古屋モスク」と呼ぶ。

16 1936年のイード・アル=フィトルは12月15日[27]。

17 1988～1998年のイスラム協会活動報告書10点，1988～2001年のイスラム協会および名古屋モスク収支報告書13点，1995～2018年のイスラム協会および名古屋モスク会議録36点，イスラム協会関係者作成のメモおよび手紙81点，2019年９月受信のイスラム協会関係者からのメール２通。以上はオリジナルは英文だが，本稿では日本語に訳して引用した。この他，1995～2019年のイード会場チラシ47点、土地購入および建築関連の領収書（銀行振込控えを含む）37点，土地売買契約書9点，土地建物権利書9点、土地建物登記事項証明書３点，名古屋モスク規則，宗教法人認可申請関連書類一式，写真数十点，2019年８～９月に聞き取りを行った名古屋モスク関係者2名と岐阜モスク関係者２名による証言など。

18 1920年代にインドで始まったイスラーム改革復興運動の布教組織。月に３日，年40日，生涯に４か月の期間，ジャマーアト（集団）を組んで他の地域に移動し３日間のダアワ（宣教活動）活動を行う。

19 理由は不明だが，活動報告書に，３月に離婚したと記されていることと関係があるかもしれない。その後，杉山は名古屋のコミュニティに戻ることはなかった。

20 当時のイスラム協会の連絡先は，メヘラントレーディング有限会社があった中村区畑江通９丁目で，1994年の会社移転に伴い，中川区荒子２丁目に変更された。

21 当時の名古屋大学の最寄り駅は地下鉄東山線の本山だった。現在の最寄り駅である地下鉄名城線の名古屋大学は2003年の開業。

22 コミュニティによっては，女性用礼拝スペースを持たないモスクやムサッラーがあり，それらがあったとしても非常に限定的なスペースであることが多い。

23 イスラム協会のムサッラーには女性用スペースがなかったため，1994年３月以降，筆者の自宅で女性の集会を開いていた。第二土曜日は情報交換や交流を目的としたお茶会，第四土曜日は礼拝の仕方やアラビア語の読み方，ハディースの輪読などの勉強会を行った。

24 例えば，同じ頃に設立した関東のモスクは，中古ビル・木造住宅・パチンコ店・パブ・製本工場・印刷会社・コンビニを改築したものであった[10]。

25 Abdur Rahmaan[26]は，モスクの所有権が個人にある場合それはイスラーム法上正しくないという見解を述べており，土地建物の所有はモスクがムサッラーと区別されるための必要条件と判断される。

26 2019年９月13日，隣接する土地201.66㎡を購入したことにより，現在のモスク敷地面積はさらに拡大し，1881.69㎡になっている。

27 東京ジャーミー，マスジド大塚，札幌マスジド，福岡マスジド，名古屋モスクの５か所。

28 SYMはSpace for Young Muslimsの略。

29 匿名の証言者によれば，名古屋から神戸モスクまで毎週自家用車で通っていた者，岐阜モスク設立の際に8000万円のサダカをした者がいる。